

哲學研究

第四百十號

第三十五卷
第十二冊

フランツ・ボアズ（承前）

——その歴史の概念について——

三

堀 喜 望

われわれは、以上においてボアズの思想的郷土を、ドイツの理論的傳統の中に定位してきた。しかし彼の人類學が自己の領域を見出し、獨自の成長と發展を完成したのはアメリカの風土においてであつた。従つてわれわれは、ボアズの第二の發展として、このアメリカ北西海岸からアラスカ地方に及ぶ諸部族の實證的な調査研究を基礎とするその諸成果を考察しなければならない。

既に上述した如く、ボアズは一八八三—八四年にパツフィン・ランドのエスキモー部族を調査してをり、また一八八六年には英領コロムビア地方の探險に参加し、従つてこれらの部族はボアズの研究にとつて、既に早くより豊かな調査領域を約束するものであつた。しかしこのやうなアメリカとの接觸を永續的としたのは、一八八九年のクラーク大學の招聘であつた。そして一八九五年アメリカ自然史博物館に獲られた地位は、ボアズをアメリカ人類學の眞の育成者にまで育成し、その今日の榮榮の基礎を築かしたものである。それと同時に、この時代にまたがつて、ボアズの

輝かしい業績の基礎もまた次々に形成されてゐる。このやうな關聯においてボアズの第二の生涯が開かれたのであつた。

ボアズが中部エスキモー族の風習・制度の記述において、この同一の環境的地域に多様な部族文化の變容が分布してゐるのを見出したことについては、既に上述した如くである。それによつて彼は、文化における地理的環境の決定が、單に制約的・修飾的な條件に過ぎぬことを事實の檢證によつて明かにした。このやうにしてボアズの研究は、特定の文化的形態を一定の地理的領域にわたる分布に従つて調査するといふ方向において進められた。これら部族文化の間の類同的な特色の分布を明かにすると同時に、ボアズはそれらの成長の原因を求めて、文化的複合の傳播とその幅合的發展に關する獨自の見解を確立するに至つたのである。ボアズはかかる研究を、先づ精神的な文化、特に北西部族の神話・物語の分布について展開し、各々の傳承群が夫々一定の分布領域をもち、様々な變形を示しながら廣い地域に擴つてゐるといふ事實に注目してゐる。例へば犬と交つて生れた犬Ⅱ兒の物語は、北西海岸のヴァンクーヴァー島から極北アラスカ地方にまで傳はつてをり、有名な「大鴉」神話も略、同じ分布領域を有する。また洪水傳説は、大湖附近を中心に大西洋岸にわたつて見出され、シイウー族、イロクオイ族の間にも擴り、更にカリフォルニアの部族においても鳥が水中から泥を採つてきて山や陸地を創つたといふ創造神話の一節に、その變形を見せてゐる。

このやうな神話的形態の分布における類同性を相互に比較することを通して、ボアズはこれらの諸形態が決して單一な有機的構成ではないといふことを明かにしてゐる。即ち物語體系は複雑な諸要素の結合した複合體であつて、その各々の要素は他の部族・地方から出來上つたままで借用されてゐることが知られ、これを借用した部族にあつては、自己の文化的傳統によつて特定の複合的統一に變形して形成されてゐる。このやうにして物語とその諸要素の類同が、一定の隣接した連続的地域の間に見出されるときに、そこに傳播による物語の發生・發展が想定される、とボ

アズは考へる。文化の比較研究において、數個の地點に見られる類同現象は、これまで人間精神の普遍性の原理に基き、夫々の部族の獨立の精神的所産として平行的に發生したものと解釋されてきた。人類學における所謂進化論的平行論或ひは獨立發生の理論と呼ばれるものがそれである。勿論、基礎的な諸觀念がこのやうな仕方では人類の様々な部族に獨立に成立することが一般にあり得べきことは、ボアズもこれを否定してはゐない⁽²⁾。しかし、神話の如く無限に多様な表出が可能な想像力の所産において——神話を説明的理知にはなくして、情意的欲求の想像的活動に關係せしめることは、またボアズの神話解釋における著しい特色であり、一般に文化的形成における情意的複合の思想をあらはしてゐる⁽³⁾——しかも數個の要素の結合から組織された物語體系の間に、一定の類同性が成立する場合には、到底その獨立平行的な發生を想定することは不可能であり、その成立に關して傳播による生成が推定されねばならないといふ。しかもそこに部族間の接觸・交通の通路が見出されるならば、この傳播の事實は一層裏づけられることとなるであらう。

かくの如く文化の類同的要素の地域的分布が比較され、その間に接觸と傳播の關係が辿られるとき、かかる文化的形態の發生と成立に關して、文化的複合體としての歴史的發展の獨自の考察をもたらすものであつた。ボアズにおいて、物語形成の原因の探求に關して人間精神の普遍的様相に歸屬せしめ、夫々の民族における獨立的な發生を推論する方法は、重大な障害に曝されるに至つた。現實の地域的に分布する文化は、夫々文化的複合體としてその民族の歴史的發展の結果である。しかるにこのやうな結果の類同性は、文化的現象においては必ずしも同一の原因から生れたものとは限らず、また同一の源泉が同じ歴史の結果を導くことなく、夫々違つた形態を生じる場合もある。従つてまた文化的現實の原因については、具體的な民族の歴史的發展に従つて辿られねばならず、ある特定の風習が單一の條件によつて統制されるといふことは證明できない。このやうにしてボアズは、同一の機能と形態をもつた風習が、夫々違つた歴史的源泉から成立し、所謂文化的輻合の現象を示すことを明かにしてゐる⁽⁴⁾。輻合の概念は、周知の如く

生物學の用語から採用され、テイレニウス、エーレンライヒなどによつて文化の内的發展による現象の類同性を説明する原理とされたが、ボアズは既に早く文化的變動における輻合の現象に注目し、これを家族形態の多様な變化の成立や幾何學的裝飾模様の起源について實證的に證明し、またトーテム氏族の制度、假面使用の風習などにも適用し、歴史的形成について新たな説明を與へた。例へば幾何學的模様の成立について、從來のバルフォアやハッドソン、マツカーディなどの進化的な見解は、純粹に美的な動因に従つて、自然的形態の寫實的表現から發達して、次第にその象徴的な定型化の段階を通つて様式化される發展として説明してゐる。これに對してボアズは、ホルムズなどの見解と同じく、これとは全く逆な發展の場合があることを指摘し、例へば製陶や籠作りの如き工程において、その作者が彼の技術を遊ぶ間に、ある一定の意匠がかかる技術形式から發生し、傳承によつて部族的に流布するといふ成立過程の認められることを明かにしてゐる。このやうな過程についてもまたボアズの文化的複合における情意的要因、即ち生活的技術的過程や遊戲的衝動の作用の結合を強調する見解が見られ、従つて自然的形態の象徴的意味づけといふ如き知的要因は、寧ろ後に結びつけられた二次的な發展であることを證明せんとしてゐる。

このやうに文化的現象の類同的發展が、しかし夫々違つた源泉から由來するとすれば、それは常に同一の原因に歸すべき同一の現象として共通の比較にもたらずことはできない。ここに形態的類同による比較の方法は重大な制限を受けることとなるであらう。「われわれは、それが發展してきたところの原因を探求し、従つて比較は、同一の原因の結果たるものが證明された現象に限られる、といふことを要求しなければならぬ。このやうな探求が一切にわたる比較研究に對して豫備の條件となることを、われわれは主張しなければならぬ。」即ち文化の包括的な比較が行はれる前に、豫めその比較素材の比較可能性が根據づけられねばならないわけである。例へば婚姻統制の機能をもつた部族區分の組織をとつてみれば、ナヴァホウ族の如く民族的な集團が集つて一つの部族組織を構成した場合があり、それは他の北太平洋岸の部族の如く部族集團が分割されて氏族區分を成立したものと全く違つた歴史的經過を辿つ

てゐる。兩者はその内容と機能との同一性に従つて共通の比較項として包攝することはできない。このやうにして比較の要件として、特定の風習に關して、この個別的な歴史的形成の原因が探求されねばならず、そこに歴史的研究の要請が基礎づけられる。そしてかかる歴史的方法は、ボアズによれば歴史的资料——文献資料と共に考古學的遺物を含む——を缺く未開民族にあつては、現存文化の綿密な記述・分析、即ち特定の風習を實行する部族文化を、接續する近隣部族におけるその風習の地理的分布に従つて、細目的に分析することによつて保證され、かくて特定風習の歴史的结合の關係を明かにすることができる、といふのである。

かかる比較方法の批判的制限は、他方においてはボアズの歴史的方法における傳播の原理を、地理的領域の經驗的に認められる連續性に限定するといふ態度とも關聯してゐる。特定の文化的風習がその歴史的形成を、具體的・個別的に跡づけられるべきとするならば、その類同性を直ちに單一の源泉から傳播したものと推論することも、また當然に許されぬところである。そこにエリオット・スミスやリヴァーズなどの古代エジプト文化の地球上への傳播殘存の假説や、グレーブナーの文化圈理論に對するボアズの批判的態度が認められる。文化的傳播は、部族的接觸の證明される範圍にのみ想定されるもので、従つて通婚、戦争、奴隸、通商などの交渉の關係によつて裏づけられねばならず、かくて文化的分布の比較は特定の地理的環境の連續性を要件とする。尤もボアズ自身アジアとアメリカとの文化において、シベリア、ベーリング海峡を通路として廣汎な傳播を想定してゐるが、しかしその場合にあつてもオセアニア、南アメリカを結びアジアからの廣汎な全面的な文化傳播を説くラツツェルやシュルツの假説が、證明の根據を缺くものとして斥けてゐる。⁽⁶⁾更にまた風習の地理的分布はどこまでも現實的形態として、その傳播の方向を決定するものではなく、一方から他方への時間的前後を示さない。かくてボアズはまた、文化圈理論の説く如く、分布密度の高い地方を中心として稀薄な周邊に傳へられるといふ規準を、一般的原理としては認めず、個々の關聯に従つて決定すべきことを主張してゐる。このやうなボアズの周到な檢證は、それ故に單なる事實に對する無批判的な盲目的累積と

して成り立つものではなく、彼の批判的態度を根柢としてゐることを知り得るであらう。

- 註(一) 1891, p. 443.
- (二) 1895, p. 430. この點にならうとまた、ホブズがダレーブナーなどの文化圈理論の無制約的な傳播論を批判する根柢がある。ホブズは、民族文化の「内面的な力に基く變化」が事實として認められることを指摘し、これに従つて文化的統合のほたらきに注目してをり、従つてかかる文化の自成的發展を否定し、單に機械的に他律的な受容傳播の中に變化の原因を認め傳播論の圖式的見解に對しても同様に批判的に反對してゐる。cf. 1911, p. 297.
- (三) *The Mind of Primitive Man*, 1948, p. 234. 尚ほ本稿第八節參照。
- (四) 1866, p. 273. cf. *The Mind etc.*, p. 273 sq.
- (五) cf. 1911, p. 297.
- (六) H. Balfour, *The Evolution of Decorative Art*, 1893; A. C. Haddon, *Evolution in Art*, 1895; G. G. Mc Curdy, *Human Origins*, 1924.
- (七) W. H. Holmes, *Origin and Development of Form and Ornament in Ceramic Art*, 4th Report, *Bureau of American Ethnology*, 1886. *Ibid.*, *A Study of Textile Art in its Relation to the Development of Form and Ornament*, 6th Report, *Ibid.*, 1888. cf. F. Boas, 1903, 1908, 1916; *Primitive Art*, 1927.
- (八) 1896, p. 275.
- (九) 1911, p. 303.
- (一〇) 1911a, p. 229, 230. しかしローツァーによれば、アジア民族のアメリカ移住に關するこのホブズの見解は、後年採殺されべきリ、このやうな意見の變化をいつてホブズの理由が説明されてゐることを指摘してゐる。cf. R. H. Lowie, *op. cit.*, p. 152.

四

以上の如きホブズの批判的態度は、更にまた人類史の一般的法則についても、思辨的理論を否定し、獨自の批判的考察に導くものであつた。従來の比較方法は、人間精神の普遍的構造の想定の下に、人類社會の進化の法則を綜合的

に構成することを課題とする心理學的な進化理論であつたが、今やボアズによつてその思辨的本質が決定的に批判された。このやうな巨大な體系は極めて價値が疑はしく、たとへかかると一般法則が発見されたとしても、それは「漠然」としたものに過ぎず、或ひは「自明の」抽象的命題として、何ら文化の眞の理解を助けるものとはならないであらう。従つてボアズによれば人類學は、どこまでも具體的な民族の文化について、その個別的な形成・變化を理解することを關心とし、その探求の批判的方法によつて歴史科學として確立されなければならない。かかる理解の方法としての平行的發展、或ひは傳播的變化の原理は、それ故にまた、心理學的その他の根據を自己自身の中にもつ事實の構成的原理としての妥當性を保證されたものではない。従つて文化發展の眞相を明かにするために、その何れかを選択するといふのは全く恣意的な事柄である。ボアズによれば、「これらの方法は、本質的には二つの違つた原理に従つて文化の靜態的現象を分類する形式に過ぎず、これらの分類を歴史的な意味のものとして解釋することは、しかしこの解釋が正當であることを證據だてる何らの試みを含んでゐない。」これらの原理は、具體的な歴史的證據によつて保證されるもので、歴史的方法としては謂はば發見統制の原理の意味をもつことができるのであらう。

かくの如くボアズは、文化の歴史的複合の事體を明かにし、その歴史的理理解の方法を批判的に確立することを、アメリカ原住民の文化の中に展開した。このやうな仕方ではボアズが取り上げた文化の領域は、神話・傳承及び藝術、言語などの如き高い精神的内面的文化の客觀的考察を初め、これと結びついて手工技術やトーテムズの體系、及び家族その他の社會組織の領域にまで及び、夫々の分野において新しい發見を擴大してゐる。それと同時に他方人種、遺傳、生長に關する自然人類學の諸問題についても多くの成果を生み、人間の自然的諸條件と文化的行動との間を結ぶ諸關係に深い示唆を與へ、人間の自然的・文化的行動の綜合的な理解としての今日の人類學的課題に對して、基礎と方向を確立した。「人間とその業蹟との學」としての人類學の廣い領域に對して科學的な探求の道を開拓したのは、實にボアズの業蹟によつてであり、特にその具體的な文化領域に關する理解の方法原理を確立することによつて、複雑

多岐な文化の結び目が一つ一つ解きほごされて行つたといふべきであらう。このやうにして具體的な民族文化の調査研究の方法として、ボアズによつて基礎づけられたものは、例へば既に上述した地域的・集中的な調査の方法——それはウイストラーなどにおいて文化領域、周邊領域などの概念の形成に關聯するものである——或ひは文化特色の複合性の理念、發展に關する傳播、輻合の原理などにはされると共に、文化特色に對する統計的方法の適用、土着言語の處理と利用に關する様々な手續き——言語資料の蒐集記録に關する技術・方法の發見と共に、それに基いて民族の精神的形象、或ひは個人的個性の内面的理解を可能にする道は、ボアズの神話研究などに基礎を與へてをり、ラディン、サピリアなどの研究はこの方向を發展したものと云へる、——は、文化の客觀的處理の手續きを與へ、更にまたこれと關聯して文化における個人的變容と文化變動の理解、文化範型の設定などの文化の統合的研究に方法的基礎を指示したものが幾多數へられるであらう。これらのボアズによつて確立され、或ひはその端緒が開かれた諸原理は、彼の弟子たちによつて繼承發展せしめられ、アメリカ人類學的特徴的な動向となつたことは周知のところであらう。

以上においてわれわれは、ボアズの方法論的批判を中心として彼の見解を考察したが、それはボアズにおいて専ら北西太平洋岸及びアラスカの諸部族の調査研究を通して成立したものと云ふべく、このやうな見解が確立した時期は上に引用した二つの論文が發表された一八九五・六年——更にそれに先立つ一八九一年頃から成熟し初めて——に求めることができる。そしてそれはまた、われわれが冒頭に引用したボアズ自身の證言が保證してあるところでもある。然るにこれらで述べられた見解は、ボアズの初期の、例へば一八八八年に發表された論文「民族學的目的」——それはわれわれの敘述における第一の時代に屬するものであるが——と比較してみると、その間に著しい轉換ともいふべき相違が見出されることは、何人にとつても明かである。この初期の論文においては、文化發展の一般的法則の發見が主要なる關心となつてゐる。それによれば、「民族學」は、「社會生活の現象の全範圍の研究」であり、「言

語・風習・移住・身體的特性がわれわれの研究の主題である。かくしてその最も直接的な第一の目的は、人類の歴史であり、しかも單に文明民族のそののみならず、氷河時代の遺物に見られる最も初期の根柢から、現代にいたるまで人類全體の歴史である」と規定されてゐる。人間生活は凡てその歴史の結果であり、如何なる些細な様相もかかる表現として過去が構成さるべき民族學の與件である。このやうにして民族學は、ボアズにおいては歴史科學として確立され、それは直接には「文化の歴史」に關係するが、それと關聯して第二に、それは文化的「發展が従ふところの法則」の發見を目的とする。⁽⁵⁾そして諸民族の文化の發展は極めて「齊一的」であると考へられるから、かかる一般法則は個別的な現象の中に表現され、また個別的現象は一般的法則の例證として解釋されるといふ關係において、この兩者の目的が結びつけられる。かくて個別的歴史的现象は、人間精神の齊一性の基礎において比較項として、一般的法則性の一つの例證とされ、その段階系列の下に包攝される。このやうな文化の法則として、例へば家族の歴史における母系から父系にいたる發展が認められてゐるが、それは比較人類學が例證せんとしたところの法則に他ならず、周知の如く後にボアズが明白に否定したところのものである。⁽⁸⁾

かくの如くボアズの人類學的關心は、最初から歴史科學のそれとして出發したことは既に上述したところであるが、それはどこまでも普遍的人類史の中に綜合さるべきものであつた。そしてこのやうな立場と方法は、當時のバステイアン、タイラーの人類學的傳統の中に基礎づけられたものに他ならない。しかるにボアズは文化の地理的な調査とその具體的な變動の様相の嚴密な研究を通して、かかる「古い思辨的理論」を批判し、「歸納的な方法」によつて個別的な文化の歴史的事情を明確にすることに成功した。このやうにしてボアズの歴史的な見解が築かれて行つたのである。しかしかかる轉換は、ボアズ自身の見解においてどのやうな意味のものであらうか。その間の關係は如何に理解さるべきであるか——その歴史的方法によつて、謂ふところの一般的法則の探究は全く斷念されたのであらうか。しからばこの歴史的方法とは、法則的認識に對して本來どのやうなものであるのか。

われわれはこのやうな關聯について、ボアズの見解の歴史的展開を理解するために、その一つの手がかりとして彼の「歴史」の觀念を取り上げてみよう、そしてそれはまた、われわれにとつての第三の問題として、後に取り上げねばならぬところの「文化統合」の問題との關聯を、引き出すいとぐちを開くものともなるであらう。

(註(一)) 1932, p. 258.

(二) 1930, p. 282.

(三) cf. A. A. Goldenweiser, *Cultural Anthropology*, in H. E. Barnes' *The History and Prospects of the Social Sciences*, 1925, p. 243 sqq.

(四) 1888, p. 627. 傍點引用者。

(五) *ibid.*, p. 634.

(六) *ibid.*, p. 634.

(七) *ibid.*, p. 635.

(八) 1896, p. 275.

(九) 1898a, p. 622.

五

われわれは、ボアズの「歴史」といふ表現について、屢々「歴史的方法」として語られてゐることを知つてゐる。それはボアズにあつては、何よりも先づ方法的な概念であつた。即ちそれは、何らかの理論として説かれる前に、探究の方法として現實そのものに關する探究の手がかりであることを意味してゐる。しかるにこのやうな立場について、ボアズはまた他の箇所においては、これを批判的方法と呼んでゐる。それは、現實の探究について批判的であることであり、認識の檢證を含まねばならない。かくてボアズにあつては、歴史的とは同時に常に批判的といふことであつたのである。

ポアズのかかる見解が形成された過程については、既に上述において略明かであらう。ポアズは、その見解を特定の原理から確立したのではなく、常にその批判を通して發展せしめた。即ちその原理が、「正常な目的」を超えて陥る誤謬を検討しつつ、その使用を妥當なる領域に限定するといふ手續によつてゐる。従つてかかる批判は、ポアズによれば、「一般性にはなくて、各々の個別的な事例に基礎を置く」ものとして確立される⁽¹⁾。しかしこのやうにして認識に従つて批判的に限定された諸原理は、現實認識に妥當するものとして、その目的の下に統一され、相互の關聯を確立することができる。ポアズの理論が歴史的再構成の全體的認識を要求し得る所以である。このやうな批判的態度は、しかしポアズにあつて、單に從來の人類學上の興へられた問題に對する批判といふにとどまらず、彼の凡ての問題展開を貫く態度であり、彼の理論全體の性格をさへなしてゐる。従つてわれわれは、ポアズの「歴史」の見解を明かにするに當つて、豫め上述の諸點を要約する意味をも含めて、ポアズの「批判的方法」について一般的な規定を檢討することから初めるであらう。

ポアズにおいて批判的とは、先づ認識の事實に基いた檢證をその第一の契機としてゐる。文化の地理的・環境的決定に關する彼の見解が新しく基礎づけられたのが、極地民族の實證的な調査に基くことは、既に見た如くである。かくてポアズの理論的探求は、どこまでも實證的な場面で展開され、そこにまたポアズの所謂「歸納的方法」とそれが結びつく所以がある。ポアズの理論的發見もまた、多くはかかる事實關聯の中で確立されたものであつた。しかしこのやうな個々の事實に適用するといふ批判の抽象的な意味は、更に第二にその妥當性の範圍を限定し、その根據を明かにすることによつて、その適用を制限するといふ本來の機能をもつであらう。例へばポアズにおいて、類同的比較の原理は、その比較可能性の根據について問はれ、かくて類同的特質の分布に關して、傳播の原理が特定の連續的地域に適用されるといふ制限が明かにされる。このやうにしてその使用の領域が確立されたことが、ポアズの科學的認識にとつて重大な轉換となつたのは、既に述べた如くである。かかる限定による分割は、批判の直接的な意味であ

るが、それはまた同時にかかる分割によつて全體における自己の正當なる位置を回復するといふ機能を含むものでなければならぬ。従つてわれわれは第三に、かかる批判的綜合が實はボアズの長い研究の生涯を導き、それに方向を與へる光となつたことを、見逃してはならない。

それは先づ何よりもボアズの人類學が、人間の自然——體質・成長——心理、文化の廣い領域を含み、夫々の精密な個別的分析を基礎としながら、謂はば一つの成層的な全體として構成され、「人間」の諸法則を明かにする統一に方向づけられた努力によつて、物語られてゐる。そしてこれら個々の諸分科が、夫々の特殊の科學水準に分散し解消することなしに、「人間」研究の課題に統合され、その各々の諸側面として、分析的に統一されることは、これらの認識を統制する綜合的理念の批判的反省において可能でなければならぬ。勿論ボアズにおいてかかる理念の批判は、何ら思辨的源泉に基くのではなく、何處までも經驗的地盤を遊離することなく、従つて理念の批判は却つて常に經驗的認識の方法・手段の批判の中に與へられてゐる。ボアズにあつては、特定の地域に生存し、その自然と人間集團に反應・生活する具體的な人間が、一つの生ける全體としての統合を形成し、人類學の統一的課題であつたのである。このやうな綜合的見地については、更にまたボアズの歴史的考察と文化動態の理論との結合・關聯についても重要な役割を擔ふものであらう。ボアズにおいて文化的特質の歴史的結合の解明は、このやうな結合に統合された特定の文化變動の過程を明かにすることを要求する。しかるにこれらの諸條件は、また文化の發展を制約するものとして作用し、従つてこの文化變動の問題は現實文化の動態的法則の統一的認識を、かの個別的な歴史的認識に結びつけてゐる。かくの如く文化の統合的認識の中で、その歴史的過程を位置づけ、兩者の關聯を明かにすることは、實はボアズの人類學の全體の課題であり、またわれわれが「歴史」の觀念を通じて解明せんとするところに他ならない。ボアズの普遍的法則の概念は、かかる歴史的過程と動態的統合とを結ぶ批判的、理念として、ボアズの人類學における綜合的機能を演ずることを、そこで明かにされるであらう。

われわれは差し當つてボアズの「批判」の意味を、上述の三つの點から指摘したが、それは實は批判の本來の役割であり、歴史的にはカントによつて初めて基礎を置かれたかの周知の規定に他ならない。——ボアズが當時のカント主義との關聯があつたかどうかについては、われわれは歴史的な事實の根據を知らない。しかし「十九世紀において哲學思索するわれら凡ては、皆カントの學徒である」とまでいはれた言葉が、單に新カント主義と呼ばれる學者についてのみはれるだけでなく、廣くドイツの理論的に思惟する頭腦についても何らかの意味であてはまるとするならば、視野の廣いボアズの若い感受性に觸れなかつたとは斷定することができないであらう。しかしこのやうな事實は兎も角、われわれの知り得る最も初期の論文、一八八七年の「地理學の研究」における方法と對象限定の仕方は、カント的な意味で批判的といふことが許されるであらう。そしてそこにあらはれた批判的態度と、個別的事實の全體的な把握に認識根據を保證せんとする立場とは、ボアズにおいてその後にかくまで一貫して繼承された根本的な見解に他ならない。即ちそれは、個別の現象を普遍的な法則性に即して認識し、從つてその出發點たる事實を單に一つの例證として普遍性の中に解消するところの法則科學に對して、かかる普遍性の諸側面に分割・消滅されることなき全體性としての價值において、個別的存在の認識を保證し、その特殊性に從つた記述において成り立つ個別的な記述科學の基礎を確立することにあつたのである。

しかしながらこのやうな批判は、ボアズにあつては特殊な法則の批判であり、特定の科學の領域における檢證として使用されるものであつた。この點においてボアズの特徴があり、從つて規範性そのものの開示、或ひは認識の價值に關する所謂アプリアリの基礎づけといふ意味での「批判主義」の理説から區別されるであらう。即ちそれは、原理の普遍性に關して、法則性一般の根據を問ふといふよりも、寧ろ特定の法則の適用範圍の限定として取り上げられる。從つてまた他方において價值の特殊性に關して、經驗的所與の一回性或ひは所與性そのものを規範的價值一般の下に基礎づけるといふのではなく、具體的な經驗に與へられた個別を、統一的な全體として保證し、その理解の諸

原理をその下に批判的に關聯づけ檢討するといふ課題に向けられてゐる。換言すればそれは、科學批判としてのその哲學的基礎づけであるよりも、寧ろ科學における批判として科學的批判といふべきであらう。そこに或ひは批判の不徹底を見るものもあるかも知れないが、しかし實はまたボアズの理論における科學としての有効性の基礎が、そこにあるわけである。このやうにしてそれは、認識の根據を認識目的としての規範性の批判的開示といふ認識論的な課題に對して、特定の認識領域に關する認識諸原理の批判的檢討として、科學の方法の指示を目ざすものであつた。この點においてまた、例へば自然科學と歴史認識との區別に關して、その自律性の範疇を認識目的に従つて意識の理念の中に定立するのみならず、夫々の認識の方法の限定として、特定の現象領域において相互に關聯するものとして一方から他方への移行・轉換の道を開き、その手続きを方法的諸原理の間に見出すことができる。即ちその認識の關係・統一を理念の中ではなく、特定の認識原理の相關的關係として發見する可能性が與へられてゐるといふことができらう。

(未完)

註(1) 1895, p. 435.

(1) W. Windelband, *Präl. d. d. n.*, Vorwort zur ersten A. H. g. e., 1883, 5. Aufl. 1924, S. IV.

(三) ボアズの科學的態度について、ローゼンバハはそれが哲學的な立場ではなく、寧ろマッハのそれであることを指摘してゐる (Lowie, *op. cit.* p. 152)。ローゼンバハはこれを事實によつて證明はしてゐないが、この關係は恐らく充分な根據をもち、事實に一層近いものと承認される。マッハの經驗的批判主義のカントに對する關係を辿ることは、認識批判の歴史的問題に屬する事情であつて、われわれのここに立入る限りではない。われわれとしては、かかる批判の概念の基礎をおいたカントを想起することによつて、ボアズの批判の意味を一層根源的に理解することができるとなすだけである。

(四) この點については前註參照。